

「運のいい人は他者を思いやる」

参考著書「科学がつきとめた運のいい人」中野信子 サンマーク出版

仕事でトラブルが起きた時、「私はできることはやりました」と言い張るのではなく、「私にミスはなかっただろうか」「私をもっとできることはなかっただろうか」と考える人。要は、自分さえよければいいと考えるのではなく、きちんと他人のことを思いやれる人。ここぞという場面だけでなく、日々のちょっとした出来事のなかでも、他人のことを思いやれる人でありたい、と考えているのです。実は、これが出来る人が運のいい人、ともいえるのです。

このことは生物の歴史が教えてくれます。私たち原生人類（ホモサピエンス）の亜種とされているひとつに、ネアンデルタール人がいます。ネアンデルタール人は、今から約20万年前から3万年前までに、ヨーロッパや中東アジアに住んでいました。

なぜ絶滅してしまったのか？

その謎はまだ明確になっていませんが、一説にはクロマニヨン人の攻撃によって絶滅したとされています。

ネアンデルタール人と原生人類の脳の大きさを比べると、ネアンデルタール人の脳の平均的容積は男性で約1500ccなのに対し、私たち原生人類は1400ccと、ネアンデルタール人のほうが大きいのです。このことから少し前までは脳の小さい原生人類が生き延びる事ができたのは、ネアンデルタール人よりも攻撃性があったから、という説が有力視されていました。

しかし最近の解釈は変わりつつあります。

というのは、脳の中の前頭葉という部分は、原生人類のほうが大きいということがわかったのです。前頭葉は、人の言語活動、運動、精神活動などを担う部分ですが、前頭葉の中でも特に前頭連合野は、思考や創造を担当する重要な部分です。未来を見通す力、それに基づいた計画づくり、利他の概念、社会性など、人間らしい思考を行うのです。

つまり、原生人類が生き延びたのは、ネアンデルタール人より社会性に長けていたからだ、という見方が有力になってきています。

男のひとりが生き延びるのは、弱い女や子供を含めた共同体が生き延びていくことより簡単です。自分さえ強くなり、オオカミなどの敵から逃れ、自分だけの食料を確保できれば、それで生き延びることができる。

しかし、ヒトとして種を残していくためには、弱い女や子供も守らなければいけない。

共同体として生き残らなければならない。

そのためには、皆で協力して生き延びようとする社会性が必要になってきます。

ネアンデルタール人は、その社会性を持っていなかったために、進化のゲームに負けてしまったというのです。

会社や個人の商店などを見てもそうですが、生き残るといえるのは、ひとつの運の良さと言えます。そしてその生き残りのコツを、ネアンデルタール人と原生人類の脳の差が教えてくれるのです。

そのコツとは、他者を思いやること。

自分さえよければいいと考えるのではなく、お互いを思いやり、皆で協力して生き延びようとする社会性を持つことなのです。

この話、いかがですか？

なんか心に残りませんか？

現代ではどうでしょうか？

自分中心のエゴでなく、共同体や絆が大切なんだと、3.11東日本大震災が教えてくれています。

部分と全体の関係性、一人がみんなの為に。

そんな世の中にしていきたいですね。

これが人でいうと品格、世界で見ると国家の文化レベルが問われてきていると感じます。

日本の「おもてなし」の三位一体の文化を誇りに思います。